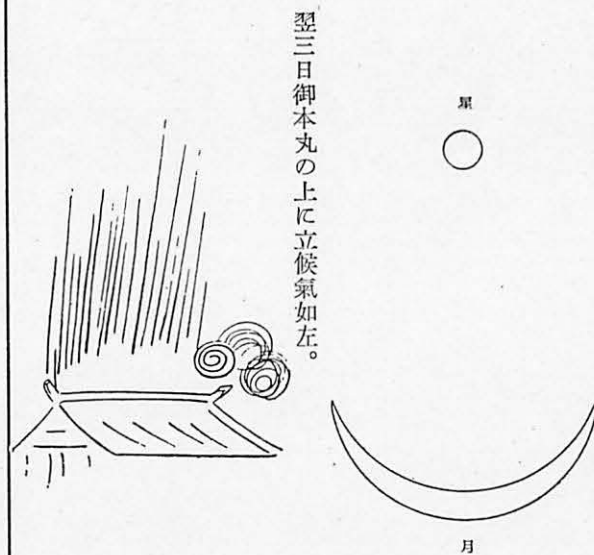


道を歩み候事十町許も歩み候程の内に、月を貫き候て月を離れ候。但月は申酉の間程にかゝり、星は東北の方より申の方へ貫候。常に二日・三日の月は二寸許に見え申候。是時は一尺許に見え候。但霧甚深有之候。貫き候星は下へぬけ候。見申内に地下へ没し候。其後又左の圖の如く星出候。尤最初の星にては無之候。光甚敷候。



翌三日御本丸の上に立候氣如左。

如此に候。下馬の諸人何も見申候。富士南の風しかも烈しく吹候へども少も散不申、四時過より半時迄の事に候。滅候時は見申内に薄く成候て滅し、散は不仕候。

一、徳川家繼の諱の由來

家繼公。説苑曰。官天下則與賢。唐虞是也。家天下則世繼三王是也。と有之を被取候。鹿苑院殿の舊例とやらんにて、宸筆にて被進候。但當今御幼稚故、仙洞御染毫被遊候由。

文昭公は大雅文王之篇を被用也。

一、屬辭比事を春秋の教と申儀等室鳩巢來狀

文七月廿日御手書

千乗説の内一句脱申所、藤太夫殿御意付の由御書付御越候。成程脱句にて候。御書入御置可給候。鈴木貞齋へ申遣候潔靜精微の説御感心の由。此一段を孔子の言に非ずと陳滯など申置候。春秋は孔子御晩年の御作に候處、詩書禮樂等と並稱せられ候は無之筈に候。愚案は最初入其國其教可知也と申ばかりは聖語にて、其跡は右の御言に付、以後に七十子の徒發明いたしたると聞え申候。去共諸經の大意を論じ申事皆得要指申候。殊に潔靜精微を以て易を論じ候事、朱子も深く此語を御取にて候。慥に聖門之遺言たるべ

きと存候。其失賊也と有之は、ちと不仁の氣味になりたがる故と存候。禪法など悟り申候へば、親の死にも涙を一つこぼし不申様成事に候。潔靜精微の外は、屬辭比事を春秋之教と申事、ちと六ヶ敷候。其故貴殿よりも不審に被申越候。老夫も久しく心に懸て思案いたし見申候。先日をかき事にて合点いたし候。或る一儒生有之、我等申通じ候衆の中へも常に招被申、子弟子の讀書の師、又は講談もいたし申候處、大酒にて酔後には言行共不都合成事有之故見眼られ、今は當地の邊土へ罷越。其邊に其人と新識の人有之、先日私宅へ尋來の節、世上の儒者の事噂申出候。右の儒生の事も申出し、老夫をもよく知候の由兼て語候由爲申聞候。外の儒者の事は、老夫溫和にあいさつ申候處、右の儒生不出來者と内々賤惡して罷在故、不覺其男は今に教授して居候やと申候。向の者も其男と老夫申候を、不審に存候躰にて候。前後の言葉つゞき、前後噂申候儒者と比し候へば、格別に耳に當候故、此屬辭比事の上に大きに褒貶有之、善惡を差別する所有之候。たとへば實に弑君の人と趙盾と比し候へば、大に不同ある事を、春秋屬辭を見候へば、一

つに弑君逆賊に被成候。此處に春秋の教は有之候。もし實に弑君之人をのみ罪し、其品輕きをば相當に罪し候ては、誰もいたす事にて候。大に違ひたる者を比して、一つ罪に罰せらるゝにて、諸人耳目を驚かし候。撥亂反正は常格にては不參候。この手段なくしては難成候へども、聊爾に眞似のならぬことより、若いたしそこなひ候ては、是非を亂して大に正理を害し候故、其弊亂也と有之候。此の如く右の語を解する人古來無之候。輕々しくは御他聞御無用にて候。

貞齋より申越候は、易の雲行雨施品物流形を、虚齋が蒙引に草木の事と迄申者非にて候由にて、自分の説を申來候。成程蒙引草木ばかりに見候は、雲行雨施の時分、枝葉滋長の驗見え候故、草木の事に申候得共、其説泥み候と存候。品物と有之候へば草木に不限候。是は四徳の亨を、天地の氣と人物の形との上にて被仰候。其語勢理にていへば、天命流行萬物各正其性と一つ事にて候。氣にては天命流行は雲行雨施にあたり、品物流形は萬物各正其性にあたり可申候。凡四時生長收藏の氣、草木にては易見候故、本義